

月の花挽歌 ～4.私鉄沿線～

4-3

「そうか……」

あっさり認めた昌幸は女将さんに頼んで、ぐい呑みをコップに変えてもらった。

「東京の女か?」「まあな」「その様子じゃかなりのご執心だな」「分かった風な口をきくな」「やに下がった顔で文句を言うな!」

互いにチェスを指す間合いで、手の内を読み会った。

「その人は、言わばクイーン(縦横斜めに何マスも動ける最強の駒)って存在か?」と山川が勝負手を指した。

「まあ、そんなところだ」と昌幸は力なく笑って見せた。

「そう簡単にリザイン(負けを意思表示)されると打つ手がないな……。幸せ太りってあるが、お前さんは肉布団瘦せてやつだね。口には出さなかったが、頬のコケ加減が気になっていたが、そんなことか!とんだスケベ野郎だ。女将さん、ホテルイカとキビナゴ」とつまみを注文した後に、「支払いはこの男がするから」とコップを手渡す女将に常連らしい冗句を飛ばした。

四本目の徳利がカラになり、冷や酒に変えたのを機に、2ヶ月前にアイスランドで亡くなったポビー・フィッシャー(第十一代チェス世界チャンピオン。アメリカ人として初の快挙)の話題に転じた。

「巨星落つとは、よくも言ったね! 柁目と同じ(チェス盤の柁目は八×八)六十四歳。いかにもポビーらしいな」と、キビナゴを食べながら山川がこぼれ話に転じてくれたので、

「渡井さんはどうしてる?」と昌幸もほっとしたついでに、ポビー・フィッシャーの事実上の妻と言われていた日本チェス協会会長代行の渡井美代子女史の動向を尋ねた。

「いろいろと噂は流れてくるが、本当のところは、私にも分からない。とてつもない男にのみ込まれたことだけは間違いないよ」

「そうか……。君はポビーに会っているし、彼の棋譜にサインまでもらっているからな。私は映像でしか見たことはないが、噂にたがわずエキセントリックな男だという印象しか残ってないな」

「奇人も、日本が満更でもなかったらしい」

「渡井さんも、サクリファイスポーン(捨て駒)になってもかまわないとまで公言して、辛抱強く尽くしていたようだし」

「そうそう、羽生善治(将棋界のトップであり、チェスプレイヤーとしても国内レーティング〈実力の点数表〉一位)も、ポビーの支援に奔走したからなあ」